The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	政治倫理にみる日米の国民(ネーション)意識 : ウォーターゲート事件とロッキード事件の比較を通じて
Author(s)	Adkins, Matthew
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40101
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	ADKINS MATTHEW（アドキンス マシュウ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学 位 記 番 号	第　12910　号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間学専攻
学 位 論 文 名	**政治倫理にみる日米の国民（ネーション）意識 ――ウォーターゲート事件とロッキード事件の比較を通じて――**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授　春日　直樹 （副査） 教 授　橋本　満　教 授　伊藤　公雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は「政治倫理にみる日米の国民（ネーション）意識――ウォーターゲート事件とロッキード事件の比較を通じて」と題し，1972年から1974年のニクソン大統領のウォーターゲート事件と1976年の田中角栄のロッキード事件を比較しながら，二つの「成熟した」ネーション・ステートで起きた政治犯罪を通じて，両国のネーション意識とその中での国家（ステート）の位置を明らかにするものである。

従来の研究と比較した本論文の独創性

従来のネーションとナショナリズム研究は，ネーション・ステート，特に暴力を独占する機関としての国（ステート）を前提として，主にその形成と建設に重点をおく傾向にある。そこでは，ネーション・ステートは，人間社会または資本主義の一発展段階としてとらえられ，政治単位として位置付けられる。ネーション意識は一定度に発達した国家を前提とし，あるいは国家によって作図されたナショナリズムによって高揚されるものとされる。これに対して本論は，ネーション意識が必ずしも国家意識やナショナリズムと不即不離な関係にあるのでなく，とくに「成熟した」ネーション・ステートにおいては政治からの自由度を高めて複雑な様相を呈するものであることを主張する。そのために，ネーション・ステートの形成と建設をはるか以前に達成したアメリカと日本を取り上げ，そのネーション意識と国家の接合のあり方について比較検討したい。

ここで政治倫理に焦点を当てるのは，倫理をめぐる議論が必ず政治と政府の善悪に触れ，ネーションの文化的意味をも顕在化させるからである。本論はウォーターゲート事件とロッキード事件という，日米それぞれの同時代に起きた政治犯罪を巡る議論について，検討をこころみる。アメリカのネーション意識において，国家は重要な位置を占めている。だが，ウォーターゲート事件が単なる政治犯罪からネーション意識自体を脅かす出来事へと変貌した過程は，政体とネーションの弁別をあらためて明確化し，政治と一線を引く「ア・フリー・ピープル」としてのネーション意識を再確認させた。一方ロッキード事件をめぐる議論は，日本の国家がネーション意識の中軸を占めるものでなく，他の多くの社会的勢力の一つに過ぎないことをあらためて明らかにしている。日本のネーション意識は，「日本人論」にみられるような一種の文化本質主義的な意識であり，アメリカと比べると国家との接合度がはるかに低いかわりに，「民族」と表現できる強度な自己同一性を示している。

本論の構成と内容

論文全体は5章からなる。1章では，ネーションとナショナリズムに関する研究を整理して，日本語の訳を含めた「ネーション」の定義について論じる。2章では，日米のネーションとナショナリズムについての先行的議論を検討する。3章ではウォーターゲート事件をとおして，ナショナリズムと異なるシビル・レリジョン的ネーション意識を明らかにし，4章ではロッキード事件の議論に登場する本質的ネーション意識と国家の不在性について検討する。5章では3章と4章に明らかにした日米のネーション意識を比較し，国家との接合の在り方について考察する。

ネーション意識の問題は，これをナショナリズム――政治的共同体への帰属感，あるいは一体化への願望――から弁別するときにはじめてあらわれる。本論はこの弁別化を，1章において，とくにゲルナーとアンダーソンのナショナリズム論の比較検討をつうじておこなう。両議論において中心を占めるのはネーション・ステートの成立過程であり，その後の変化に焦点が当てられたことは少ない。ネーション・ステートが形成されたあとのネーション意識とは，必ずしもナショナリズム的政治性を帯びる必要はないし，国家との強い紐帯を保つともかぎらずかりに紐帯を維持したとしてもその性質は政治からの自由度をかなり高めている可能性がある。

このことを前提として，2章では，日米両国の国家帰属感とネーション意識の中心的局面に触れる。アメリカのネーション意識は「血」や土着文化によって定義されるのでなく，独立当初から「自由」の思想を中核として，成り立っていた。とくに「自由選択」や「自由参加」といった西洋憲法史に中世からあらわれた概念と，18世紀の啓蒙思想およびアメリカの地理的歴史的状況が一体となって，「ア・フリー・ピープル」という概念が確立され，国家としてのアメリカを支えるようになった。このネーション意識の表現は，ロバート・ベラーのいう「シビル・レリジョン」的な言説をまとい，自由の聖地として開かれたアメリカを今日まで支えている。しかし南北戦争後は国家機構（ステート）が次第に大きくなって，ネーションとの結びつきが教育でも強調されるようになり，とくに今世紀に入ると反ファシズムや反共産主義の高まりによってネーションとステートの一枚岩的一致を許すまでになった。この一致を嫌う動きは60年代に目だってきたが，「ア・フリー・ピープル」の再認識が本格化するためにはウォーターゲート事件まで待たねばならなかった。

日本のネーション意識はアメリカとまったく異なる。ここでは列強の軍事的経済的脅威がネーション・ステート建設を死活の問題として突きつけ，藩閥政府によってヨーロッパを模倣した国家が創られた。ネーション・ステートの理想はゲルナーのナショナリズムによれば「民族」国家へとかぎりなく近づくが，日本はヨーロッパのどの国よりもこの理想へと接近している。藩閥政府はヨーロッパの立憲の背後に宗教があるとみなし，日本の国家が正統化するため土着宗教を利用しながら国家神道を広めた。ステートとネーションは明治初期まで明確に識別されたが，憲法制定以降は戦略的な一体化が進められた。天皇を頂点とする「家族国家」の理念が形成され，国家への忠誠と一体感はネーションに「民族」としての意識を植え付けた。けれども昭和の敗戦が天皇を政治から切り離してから以降は「民族」としての意識の維持は政治よりも文化の次元でおこなわれており，日本人論に代表される言説を必要とし続けている。

さて，以上の日米ネーション意識の対比を顕在化させるのがウォーターゲートとロッキードの両事件であり，本論はこれを3章と4章において詳しく考察している。ウォーターゲート事件においては事件の詳細が暴露されるにつれて，使用する言語が日常的現実的な政治犯罪用のそれからシビル・レリジョン的な色合いを強めていった。ネーションとステートの同一性を過信する「冷戦の戦士」ニクソンは，シビル・レリジョンの大司祭としての役割を演じて罪の隠蔽をはかったが，このもみ消し工作があとで暴露されると，シビル・レリジョンの言説が流用された「ア・フリー・ピープル」の「ア・フリー・ピープル」たる価値観を守りも尊重もしていないことが露骨にあばかれたのである。

ロッキード事件では「民族」という言葉は殆ど登場しないものの，「日本人的」「日本人らしさ」といった文化本質主義的な言語が中心的役割を果たした。すなわそれは，主犯田中の政治スタイルと絡められ，戦後の民主主義をめぐる評価として論じられたのである。議論では日本の民主主義の未熟さを嘆く啓蒙派と文化への不適度さを注視する日本人論派とに意見の大別をみたが，いずれにおいても国家に対する帰属感情を高揚させるものではなかった。また捜査と裁判の過程で，しばしば「真実」よりも自分のグループ（政治集団，政府）は社会で競争している一勢力グループに過ぎないという印象を与えた。

このように両事件の比較をつうじて明らかになるのは，日本のネーション意識が「日本人」という「民族」への自己同一化をつうじて成り立つ一方，ステートとの接合度を弱いままにとどめるのに対し，アメリカのネーション意識は「ア・フリー・ピープル」を基本理念に据えて，その「自由」を保障するはずのステートに距離をとりながら向かい合うという対照的な姿である。そこにはまた，「公」という概念の差異や，社会的インスティチューション――「習慣」や「連続性」の意味を含み，かつ「国家」を含まないような「機関」や「制度」――への信頼の差異など興味深い問題が含まれている。いずれにせよ本論の展開した日米の比較によって，「成熟した」ネーション・ステートにおけるネーションが，その自由度を保ちながらいかにステートと関わるのかという今後の世界にとっての重大な問題が，具体的なかたちで提起されて洞察を深められたものと確信する。

論文審査の結果の要旨

本論文は日米両国のネーション（国民）意識の比較を，ウォーターゲート事件とロッキード事件の対比を通じてこころみたものである。論文の特徴は，およそ次の3点に集約できる。(1)ネーションをステート（国家）から分離して，その意識の変化をステートとの相互連関の中で浮かび上がらせたこと。(2)日米両国の対比を大変鮮やかに提起したこと。つまり，ロッキード事件・ウォーターゲート事件というほぼ同時期に政治の最高権力者を巻き込んだ二つの事件を手がかりにして，「民族」「ア・フリー・ピープル」という鍵概念をそれぞれについて抽出し，ネーション意識の類似点と相違点を整理したこと。(3)日米の比較を，とくに英語から日本語への翻訳に重点を置いておこなったこと。

本審査委員会は論文の内容に議論の余地を認めたものの，上記の特徴を高く評価して博士（人間科学）の学位授与に値すると判断した。